

インドネシア バリ島の伝統治療師バリアン

橋 本 昇 久 米 信 好 辰 野 正 和

I. はじめに

Erland Pettman は「A History of Manipulative Therapy」で、伝統的な治療として筋・骨格系の疾患に対し、徒手技術を用いる治療師が存在する国として、日本・中国・インド、インドネシアの Balinese, ハワイの Lomi-Lomi, 中央アジアの Shaman, メキシコの Sabodor, ネパール・ロシア・ノルウェーの Bonesetterを紹介している。この中で日本の柔道整復師以外は、全て無資格医療者である。

II. インドネシア バリ島のバリアン (Balian)

悪霊、精霊、呪術師（レヤック）などに対抗するものとして、バリアン (Balian) がある。

バリアンは、プダンド (Pedanda=ブラフマノ出身の司祭), プマंक (Pamangku=平民僧の司祭), サドゥグ (Sadeg=巫女) と同様、宗教的職能者にあたり、英語では、シャーマンなど訳されている。シャーマンは本来、ツングース語の šaman (シャマン), ロシア語の шаман (シャマーン) を経由し、各国に広まり、英語では shaman (シャーマン) という。シャーマンは、シャーマニズムにおいて、超自然的存在と直接接触・交流・交信する役割を主に担う役職である。

インドネシア語では、旧式の医師や呪いによる治療師は、ドクン (Dukun) ともいわれている。また、アフリ バタン トゥーラン (ahli besah tulang) という整骨医を意味する言葉がある。

バリアンは男性が多く占星術や暦法にも精通し、世襲的に受け継がれる。それは治療にあたって膨大な知識や貴重な道具、さらに重要であるサクティと言われる超自然的霊力が必要だからだといわれている。

バリアンには6つの職務がある。

1. Balian Usada : はじめにマントラ (mantra=不思議な力を持った呪文) を唱え、様々な薬用植物を使用して治療する。魔術的な道具を使い、嫉妬や怒り、悲哀を相手に植え付けることができる。

2. Balian Manakan : 助産婦

3. Balian Tenun : 占い師。ロンタル (Lontar=ロンタル椰子の葉に書かれた古文書) の教えをもとにして、

消失した物質のありかを告げる。

4. Balian Taksu : 小さな子供に乗り移り、誰の生まれ変わりかを告げる。子供が病気の時、誰がそうしたかを告げる。死亡した人がバリアンに乗り移り、隠された財産などを告げる。

5. Balian Eedan : 神が乗り移り、神のお告げを説明する。

6. Balian Sesonteng : 許されない結婚の時、結婚する2人に隠れ場所に招かれ、神に対する供物を作る。

これらは、呪医師と呪術師の2種類に分類できる。呪医師は、ロンタル文書から得た知識や呪力、経験から治療を行う。

この中でも、日本の柔道整復師に良く似た、骨折・脱臼・打撲・捻挫などの接骨治療技術を持ったマंक・スダルサナ (MANGKU SUDARSANA) 氏のもとを実際に訪れ、その技術について見学する機会を得たため報告を行う。

III. バリアン (Balian) の接骨治療技術

我々はバリ島の中心から車で2時間半をかけ、Jln. Yudistira No12 Dalem Puri, Dsn.Kedungdung Besakih, Rendang 80863, -Karangasemにあるマंक・スダルサナ氏の病院を訪れた。道を挟んだ反対には、山の神を奉る大きな寺院があった。

診察は午後1時から始まり、1日に60名程の骨折患者が、何時間もかけて集まって来るとのことだった。

診察を始める前に神に祈りを捧げ (ヒンズー教の儀式)、患者とその家族に聖水のようなものを与える (図1)。患者は始めにお供物代として約2,000円を支払い (初診料のようなもの)、治療を受けるごとに気持ち (心付け) を支払い、治療が行われる。

診察は部屋の中でなく、タイル張りの縁側のような場所に藁のようなものが敷かれた上で行い、驚くべきはX線室があり、ポータブルのX線撮影装置と暗室があった (図2)。

信者で経済的に余裕がある患者は、病院でX線検査を行っているようで、X線写真を持参していた。

マंक・スダルサナ氏はX線写真を見て、患部に黒い瓶の中に入った謎の液体 (図3) を塗り、徒手整復と外



図1 診察前の儀式：診察前に神に祈りを捧げ、信者の額に米粒のようなものを付けていた。信者は供え物を神に捧げていた。

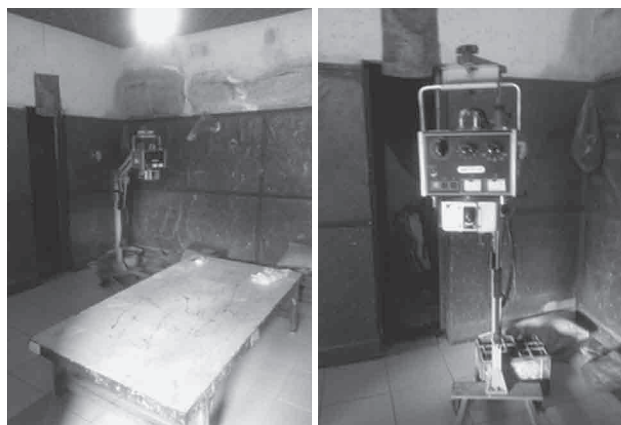


図2 X線室とX線装置：かなり古いポータブルのX線装置で奥に赤灯が一つぶら下がった暗室があった。



図3 謎の薬（日本で古くから使用されていた整骨水のようなものであろうか？ガイドの説明では、使ってもなくならないで、自然に増えてくると説明していた）

固定または手技療法を行うという基本的な流れのようで、柔道整復師の施療に似ていた。なお、マンク・スダルサナ氏のもとには、オーストラリアからも患者が来院し、オーストラリアでも紹介されている。

1. 症例1

8歳の男児、2週間前にケガをして、自宅から6時間かけて来院したとのこと。診察前、ご両親にお願いし、X線写真を見せていただいた結果、脛骨内果が骨折し、4mm程離開していた。まず、全足趾を牽引し、距腿関節を内返しするように徒手整復していた（図4）。X線写真では内果の離開が認められたが、何故か外果に徒手整復を行っており、外固定も行わないため、患者は痛そうに跛行を呈して帰っていった。



図4 症例1（脛骨内果骨折）に徒手整復を行っている。

2. 症例2

3歳の男児、下腿両骨の骨折のようで、病院で行ったであろうキャストライトのシャーレで固定されていた。経過観察で来院したようであるが、膝関節を伸展位で固定しているため、患側の膝関節が拘縮を起こして自動運動が不能のようであった。特に運動療法のようなことは一切行っていなかった（図5）。

3. 症例3

15歳の女性で、4時間前にバイクを運転中、交通事故で負傷。救急搬送され、病院では手術を勧められたが、家族に付き添われて来院したとのこと。X線写真では鎖骨中1/3部の定型的骨折で、患側の上腕を肘から突き上



図5 症例2（下腿骨幹部両骨骨折）は経過観察のため、謎の黒い薬を塗って治療は終了。

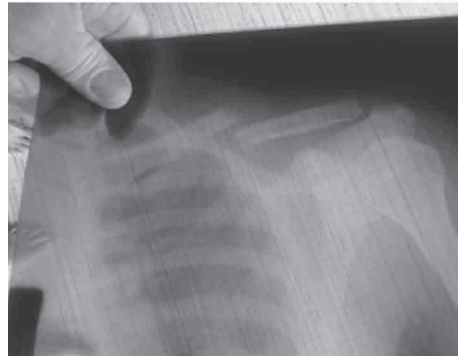


図6 症例3のX線写真と徒手整復：徒手整復後には皮下に突出していた骨折端が整復されていた。



図7 ガーゼと綿花で作製した外固定：リング固定の要領で外固定を作製。



図8 綿花棒による外固定：胸郭拡大・腋窩神経絞扼防止が考えられている固定方法だった。

げるように固定し、中枢骨片に直圧を加えて徒手整復した（図6）。驚くべきは、固定の方法であった。患者に併設の薬局でガーゼと綿花を購入させ、ガーゼに謎の薬を付け、綿花湿布のような状態で綿花を巻き込み、長い棒状のリング固定のようなものを作製した（図7）。長い綿花棒の中央を頸部の後方に当て、前方から両側の腋窩を

通し、肩甲間部でクロスして、頸部に当たった綿花の下を通して上下のガーゼ端を結んで固定した。徒手整復・外固定共に理にかなっており、素晴らしい技術であった（図8）。帰国後、牧内与吉先生に話を聞いた所、九州で3代続く整形外科で、30年以上前に日本で報告された固定方法に類似しており、この固定を行い、仰臥位で寝か

せておけば、鎖骨骨折の殆どは治癒するとの内容であったとのことであった。

IV. おわりに

インドネシア バリ島の接骨を専門とするバリアンは、日本の柔道整復師と類似する点が多かった。我々が帰国後に聞いた話によると、大戦から帰還した軍医は、医学部に入学して医師となった者の他、柔道整復師となった者もいるとの話を聞いた。インドネシアを統治した歴史

があることから、何か関係があるのではないかと、今後、継続した調査を行いたいと思う。

最後にマンク・スダルサナ氏には、突然の訪問にもかかわらず、快く治療を見学させていただき、また、本報告にあたり、写真の掲載を承諾していただいた患者様とそのご家族に深謝する。

参考文献

- 1) Pettman E.: A history of manipulative therapy, J Man Manip Ther., 15(3), 165-174, 2007